

今朝は職人氣質というお話です。

私のお寺の境内には薬師堂があり、本尊の薬師如来は秘仏として江戸時代から、^{うま}午年にだけ御開帳されてきました。

お薬師さまの厨子は江戸時代に^{あつら}誂えられたもので、屋根飾りなどはボロボロの状態でした。

三十年ほど前私が住職になったばかりのころのことです。

お檀家さんで漆塗りの職人をしておられた塗師屋の長田さんに「厨子を、新しくするとすれば、どこにお願いすればいいでしょうか」と尋ねると、「^{さしもの}指物大工の福島さんが、いいと思う」と返事が返ってきました。

それから、厨子を新しくできないまま、三十年が過ぎ、長田さんも福島さんも亡くなった去年の春のこと。遅ればせながら^{うま}午年を前によく厨子を新調することになりました。三十年前の長田さんの勧めに従って、お父さんの後を継いだ指物職人の福島さんの息子さんをお願いしてみました。

息子さんは心良く引き受けてくれました。

それから半年余りが過ぎた去年の暮れ、厨子が納められました。総ケヤキ作りで、すり漆塗の仕上げが施された厨子は、立派な出来ばえでした。

数百年の時を経た厨子が、代々受け継がれた職人氣質によってよみがえり、お薬師さまが午年の新年を迎えられると思うと、感慨深いものがありました。

(以下字数によります)

しかし一方で福島さんや長田さんの後継者はおらず、この辺りには殆んど職人さんがいなくなってしまうました。仕事に妥協を許さない職人氣質が廃れていくさびしさを感じています。